一日一筆

岡本綺堂

青空文庫

一　五分間

用があって兜町の紅葉屋へ行く。株式仲買店である。午前十時頃、店は掻き廻されるような騒ぎで、そこらに群がる男女の店員は一分間も静坐してはいられない。電話は間断なしにチリンチリンいうと、女は眼を嶮しくして耳を傾ける。電報が投げ込まれると、男は飛びかかって封を切る。洋服姿の男がふらりと入って来て「郵船は……」と訊くと、店員は指三本と五本を出して見せる。男は「八五だね」とうなずいてまた飄然と出てゆく。詰襟の洋服を着た小僧が、汗を拭きながら自転車を飛ばして来る。

上布の帷子に兵子帯という若い男が入って来て、「例のは九円には売れまいか」というと、店員は「どうしてどうして」と頭を掉って、指を三本出す。男は「八なら此方で買わあ、一万でも二万でも……」と笑いながら出て行く。電話の鈴は相変らず鳴っている。表を見ると、和服や洋服、老人やハイカラや小僧が、いわゆる「足も空」という形で、残暑の烈しい朝の町を駈け廻っている。

私は椅子に腰をかけて、ただ茫然と眺めている中に、満洲従軍当時のありさまをふと思い泛んだ。戦場の混雑は勿論これ以上である。が、その混雑の間にも軍隊には一定の規律がある。人は総て死を期している。随って混雑極まる乱軍の中にも、一種冷静

の気を見出すことが能る。しかもここの町に奔走している人には、一定の規律がない、各個人の自由行動である。人は総て死を期していない、寧ろ生きんがために焦っているのである。随って動揺また動揺、何ら冷静の気を見出すことは能ない。

株式市場内外の混雑を評して、火事場のようだとはいい得るかも知れない。軍のような騒ぎという評は当らない。ここの動揺は確に戦場以上であろうと思う。

二　ヘボン先生

今朝の新聞を見ると、ヘボン先生は二十一日の朝、米国のイー

ストオレンジに於て長逝せられたとある。ヘボン先生といえば、何人もすぐに名優田之助の足を聯想し、岸田の精錡水を聯想し、和英字書を聯想するが、私もこの字書に就ては一種の思い出がある。

私が十五歳で、築地の府立中学校に通っている頃、銀座の旧日報社の北隣――今は額縁屋になっている――にめざましと呼ぶ小さい汁粉屋があって、またその隣に間口二間ぐらいの床店同様の古本店があった。その店頭の雑書の中に積まれていたのは、例のヘボン先生の和英字書であった。

今日ではこれ以上の和英字書も数種刊行されているが、その当時の我々は先ずヘボン先生の著作に縋るより他はない。私は学

校の帰途、その店頭に立って「ああ、欲いなあ」とは思ったが、価を訊くと二円五十銭也。無論、わたしの懐中にはない。しかも私は書物を買うことが好で、「お前は役にも立たぬ書物を無闇に買うので困る」と、毎々両親から叱られている矢先である。この際、五十銭か六十銭ならば知らず、二円五十銭の書物を買って下さいなどといい出しても、お小言を頂戴して空しく引退るに決っている。何とか好智慧はないか知らぬと帰る途次も色々に頭脳を悩ました末に、父に対ってこういう嘘を吐いた。

学校では今月から会話の稽古が始まった。英語の書物を読むには英和の字書で済むが、英語の会話を学ぶには和英の字書がなくてはならぬ。就てはヘボン先生の和英字書を買ってもらいたい。

殊に会話受持のチャペルという教師は、非常に点数の辛い人であるから、会話の成績が悪いとあるいは落第するかも知れぬと実事虚事打混ぜて哀訴嘆願に及ぶと、案じるよりも産むが易く、ヘボンの字書なら買ってもいいということになって、すぐに二円五十銭を渡された。父は私の申立を一から十まで信用したかどうか判らないが、とにかくにヘボンの字書ならば買っておいても損はないという料見であったらしい。その当時に於ける彼の字書の信用は偉いものであった。

　その字書は今も私の書斎の隅に押込まれている。今日ではあまり用をなさないので、私も殆ど忘れていたが、今や先生の訃音を聞くと同時に、俄にかの字書を思い出して、塵埃を掃いて出し

て見た。父は十年前に死んだ。先生も今や亡矣。その当時十五歳の少年は、思い出多きこの字書に対して、そぞろに我身の秋を覚えた。簾の外には梧の葉が散る。

（明治四十四年九月）

三　品川の台場

陰った寒い日、私は高輪の海岸に立って、灰色の空と真黒の海を眺めた。明治座一月興行の二番目を目下起稿中で、その第三幕目に高輪海岸の場がある。今初めてお目にかかる景色でもないが、とにかくに筆を執るに当って、その実地を一度見たいというような考えで、わざわざここまで足を運んだのである。

海岸には人家が連ってしまったので、眺望が自由でない。かつは風が甚だしく寒いので、更に品川の町に入り、海寄りの小料理屋へ上って、午餐を喫いながら硝子戸越しに海を見た。暗い空、濁った海。雲は低く、浪は高い。かの「お台場」は、泛ぶが如くに横わっている。今更ではないが、これが江戸の遺物かと思うと、私は何とはなしに悲しくなった。

今日の眼を以て、この台場の有用無用を論じたくない。およそ六十年の昔、初めて江戸の海にこれを築いた人々は、これに依て江戸八百八町の人民を守ろうとしたのである。その当時の徳川幕府は金がなかった。已むを得ずして悪い銀を造った、随って物価は騰貴した、市民は難渋した。また一方には馴れない工事のた

めに、多数の死人を出した。かくの如く上下ともに苦みつつ、予定の十一ヵ所を全部竣工するに至らずして、徳川幕府も亡びた、江戸も亡びた。しかも江戸の血を享けた人は、これに依て江戸を安全ならしめようと苦心した徳川幕府の当路者と、彼ら自身の祖先とに対して、努力の労を感謝せねばなるまい。

今日は品川荒神の秋季大祭とかいうので、品川の町から高輪へかけて往来が劇しい。男も通る、女も通る、小児も通る。この人々の阿父さんや祖父さんは、六十年前にここを過ぎて、工事中のお台場を望んで、「まあ、これが出来れば大丈夫だ」と、心強く感じたに相違ない。しかもそれは殆ど何の用を為さず、空しく渺茫たる海中に横わっているのである。

荒神様へ詣るもよい。序にここを通ったらば、霎時この海岸に立って、諸君が祖先の労苦を忍んでもらいたい。しかし電車で帰宅を急ぐ諸君は、暗い海上などを振向いても見まい。

四　日比谷公園

友人と日比谷公園を散歩する。今日は風もなくて暖い。芝原に二匹の犬が巫山戯ている。一匹は純白で、一匹は黒斑で、どこから啣えて来たか知らず、一足の古草履を奪合って、追いつ追われつ、起きつ転びつ、さも面白そうに狂っている。

「見給え、実に面白そうだね」と友人がいう。「むむ、いかにも

無心に遊んでるのが可愛い」といいながらふと見ると、白には頸環が附いている。黒斑の頸には何もない。「片方は野犬だぜ」というと、友人は無言にうなずいて、互に顔を見合せた。

今、無心に睦じく遊んでいる犬は、恐く何にも知らぬであろうが、見よ、一方には頸環がある。その安全は保障されている。しかも他の一方は野犬である。何時虐殺の悲運に逢わないとも限らない。あるいは一時間乃至半時間の後には、残酷な犬殺しの獲物となってその皮を剥がれてしまうかも知れない。日暖き公園の真中で、愉快に遊び廻っている二匹の犬にも、これほどの幸不幸がある。

犬は頸環に因て、その幸と不幸とが直ちに知られる。人間にも

恐らく眼に見えない運命の頸環が附いているのであろうが、人も知らず、我も知らず、いわゆる「一寸先は闇」の世を、何(いず)れも面白そうに飛び廻っているのである。我々もこうして暢気(のんき)に遊び歩いていても、二人の中(うち)の何方(どっち)かは運命の頸環に見放された野犬であるかも知れない。

「おい、君。そこらで酒でも飲もう」と、友人はいった。

青空文庫情報

底本：「岡本綺堂随筆集」岩波文庫、岩波書店
2007（平成19）年10月16日第1刷発行
2008（平成20）年5月23日第4刷発行
底本の親本：「五色筆」南人社
1917（大正6）年11月初版発行
初出：「木太刀」
1911（明治44）年12月、1912（明治45）年1月号
入力：川山隆
校正：noriko saito

2008年11月29日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一日一筆

岡本綺堂

２０２０年　７月１３日　初版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　http://aozora.xisang.top/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/